

# サヘル地域の農牧民による出稼ぎ導入とそのインパクトへの対応 —ブルキナファソ北東部 I 村の事例から—

石本雄大（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

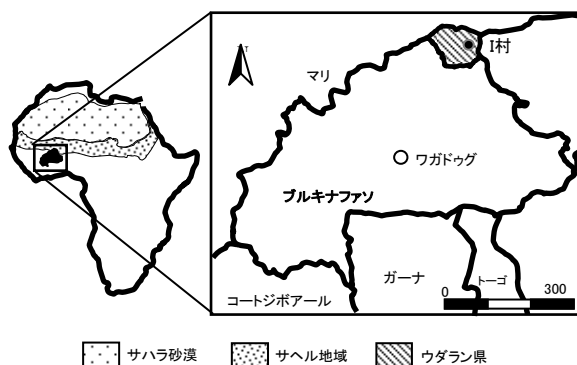
## 1. はじめに

旧植民地からの独立以降、西アフリカ内陸国においてサヘル地域からギニア湾沿岸諸国都市部への若年成人男性による出稼ぎ労働が漸次増加している。これは、自然環境によって食料生産が不安定なサヘル地域において家計の安定化に非常に貢献している。しかしその一方で、若年労働力流出によるサヘル地域の生計システムへのインパクトは年々増大している。本研究の目的は、出稼ぎ労働導入の経緯を把握し、それに伴う労働力流失へのサヘル地域の人々の対応を解明することである。本稿は、農牧民タマシェクの暮らすブルキナファソ北東部 I 村における事例研究に基づく。

## 2. 調査概要

現地調査は、2006年12月中旬から2007年2月中旬および2007年11月中旬から2008年1月下旬までの期間、ブルキナファソ北東部のウダラン県 I 村にて行った（第1図）。I 村の住人はタマシェク語を話し、農耕・家畜飼養・採集活動を営むと同時に、出稼ぎも行っている。

調査は、期間中に出稼ぎから帰村した者 19 名、およびかつて出稼ぎを行ったことのある者（これを引退者と呼ぶ）の 10 名を対象に直接聞き取りで行った。ただし、調査時には出稼ぎに出かけて不在だった 13 名、過去に出稼ぎを行っていた故人 9 名、さらに他の地に移出していた 4 名の出稼ぎに関する情報も直接聞き取り調査を行った時に得られたので、分析にはこれらの情報も利用した。これらの人々の出稼ぎに関する情報は、出稼ぎ者の兄弟や同時期に出稼ぎに行っていた者からの情報と言うことになる。



第1図 調査地域

主な調査項目は、出稼ぎの期間、出稼ぎ先、出稼ぎ先での職業、そしてさらに出稼ぎ者が出稼ぎ中の I 村における生業活動のやり方についても聞き取りを行った。

## 3. 出稼ぎの導入と浸透

本章では、サヘル地域に位置し農牧民の暮らす I 村において出稼ぎ労働がいかに導入され浸透していったかを解明するため、導入契機・従事者数・出稼ぎ先・出稼ぎ先での職業・労働力流出

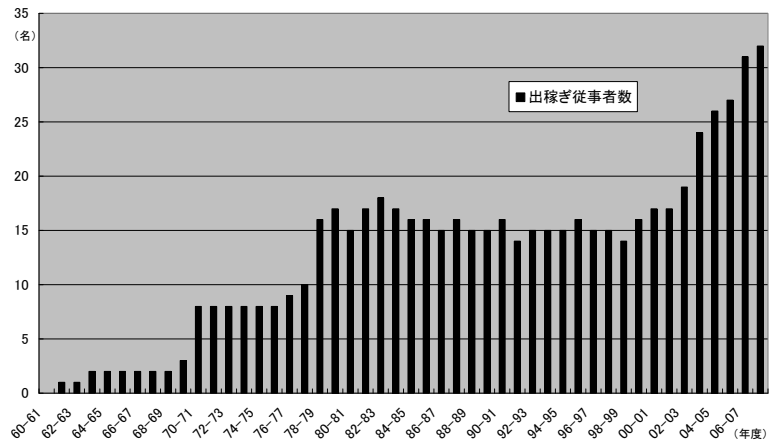
への人々の対応に注目し分析していく。

### 3-1. 出稼ぎの導入契機

聞き取りによって把握された事例にもとづく限り、I村における最初の出稼ぎは1961-62年の乾季に開始された。この最初の出稼ぎ者は、前年の乾季にI村に移住してきた男性で、移入する前から出稼ぎに行っていたという。この村から1kmほどの距離に位置する隣村では、1961年以前から複数の成人男性が出稼ぎに出かけていたという。これらの出稼ぎ者の羽振りの良さ、服装の華やかさに刺激を受け、出稼ぎ労働は徐々に普及していった。

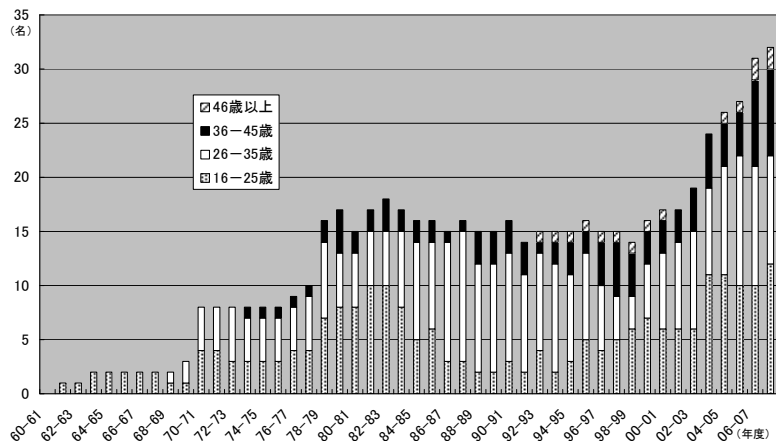
### 3-2. 出稼ぎ従事者数の変化とその背景

出稼ぎは、成人男性の中でも20歳弱から30歳代の若い世代が中心になって行われていた。第2図に「年度」ごとの出稼ぎ従事者数を示した。ここでいう「年度」とは、6月に始まり翌年の5月に終わる一年である。それは、雨季が6月から始まり9月まで続き、そのあと乾季が10月から翌年の5月まで続くからである。タマシエクの人々



第2図 出稼ぎ従事者数の変化

は、1年を雨季に始まり乾季に終わると考えている。第2図より、1960年代に出稼ぎに行った者の数はごく少数に限られていたこと、1970年代には急速に増加したこと、1980年代および1990年代には概ね横ばい状態となったこと、2000年代には再び増加に転じたことが明らかになった。現在生存している人からの聞き取りによる調査結果であるので、出稼ぎ者の数が増加傾向を示すことは当然であるが、ここではその増加割合の変化に注目して以下の分析を行う。



第3図 年代別出稼ぎ従事者数の変化

まず1970年代以降を詳細に分析するため、出稼ぎ従事者数を年代別に分け第3図に示した。I村では、16歳から20歳の間

に成人儀礼を行うため、16歳未満の男性は出稼ぎに行かない。そこで、16-25歳を出稼ぎ労働の適齢期に達する年代とし、それ以降を26-35歳、36-45歳、46歳以上と出稼ぎ従事者を4つの年代に区切った。

第3図より1970年代に入ると16-25歳および26-35歳の出稼ぎに出る成人男性が増加し、中でも1970年・78年に伸びが著しいことが判明した。この増加は、1970年代に入りI村におい

て出稼ぎが急速に浸透したことによると考えられた。しかし当時は、出稼ぎに出ることは未だ一大決心を要することであった。1970年・78年に参加者が集中したのもその表れの一つで、単独で出稼ぎに行くことができなかった者数名が誘い合って経験者と共と同じ日に出稼ぎに初めて出かけたのである。そののち数年間は、新たに中盤に行く者はいなかった。

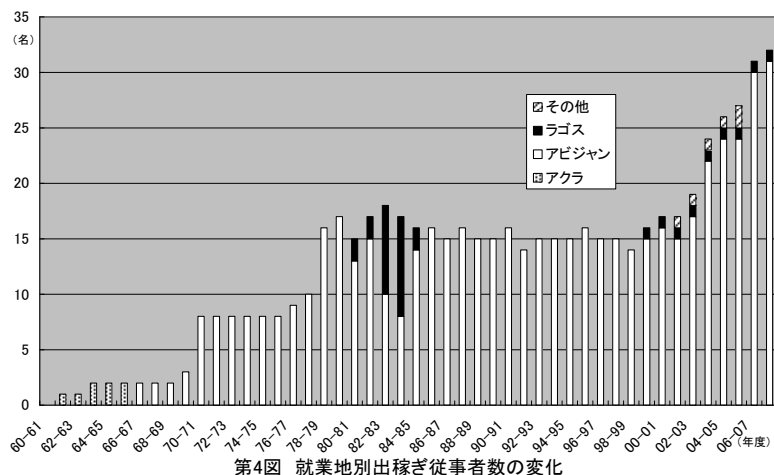
次に1980年代を見ると、1982-83年以降に16-25歳の出稼ぎ者が減少し、26-35歳の出稼ぎ者が増加したことが確認された。これは、1970年代に出稼ぎに出始めた人たちが26-35歳の年齢層に達したこと、その数が新規の出稼ぎ者を上回ったことによる。また、1980年代中盤から90年代初頭までに従事者の総数が減少傾向となっているが、これは結婚を機に出稼ぎをやめる者が増加したことによる。

1990年代の出稼ぎ者の数を見ると、1980年代と変わらず横ばい状態にあることが分かる。そして中盤以降に16-25歳の出稼ぎ者が増加し、後半になり26-35歳の年代が減少しつつ36歳以上の年代が増加したことが明らかになった。16-25歳層の増加は適齢期に達した男性が出稼ぎに行くことがこの頃から一般化したためであり、この時期には1970年代・80年代生まれの男性が適齢期に達した。また後者は、26-35歳の出稼ぎ者が次の年代に達していったことによる。16-25歳の年代の増加にもかかわらず総数がほぼ一定となっているのは、参加者と同程度の引退者が出たことによる。

2000年代に入ると出稼ぎ従事者は増加し続けているが、それは全ての年代が増加したことによる。これは、1990年代の傾向に引き続き適齢期に達した男性が必ず出稼ぎに出たこと、これまでの出稼ぎ者の継続によって26歳以上の各年代に繰り上がる者が増加したことによる。

### 3-3. 出稼ぎ先の変遷

I村の成人男性による出稼ぎは、最初ガーナの首都アクラであった。数年後コートジボアールの当時の首都アビジャンに出稼ぎ先が移ったあと、一時期ナイジェリアの当時の首都ラゴスに盛んに出稼ぎに行くようになった。しかしすぐに少数の例外を除き大部分の出稼ぎ者が再びアビジャンに出かけるようになり、現在もその状況が続いている（第4図）。



出稼ぎ労働の開始当初、行き先がアクラからアビジャンへと変わったのは、ガーナにおける通貨移行が契機となったと考えられる。1965年にガーナの通貨がガーナ・ポンドからセディへ移行し、この時ガーナの通貨はブルキナファソの通貨 CFA フランと比べて価値が急落した。そのため、それ以降出稼ぎ者は労働先をアクラからアビジャンへと変更したのである。その後、アビジャンへの出稼ぎ者は増加し続け、1970年代末には出稼ぎ従事者が17名に達した。

1980年に、他村に住む血縁者からナイジェリアの好景気を聞きつけた者が、アビジャンからラ

ゴスへと出稼ぎ先を移した。その後ラゴスでの就業者は急増し、最盛期 1983-84 年には出稼ぎ従事者が 9 人に達し、アビジャンへの出稼ぎ者を上回った。しかし、1983 年にブルキナファソ人、コートジボアール人、ガーナ人を対象とした在留外国人追放令<sup>1)</sup> がナイジェリア政府によって発せられると、ラゴスへの出稼ぎを中止する者が相次ぎ、1985-86 年にはラゴスへの出稼ぎ者は 0 人となった。

その後はまれに、ラゴスやブルキナファソの首都ワガドゥグ、リビアのサハラ砂漠地帯などへ出稼ぎに行く者が出たが、それらは単独で行われ、アビジャンが中心的な出稼ぎ先であることには変わりはない。2008 年 1 月時点における出稼ぎ従事者 32 名のうち 31 名がアビジャンへの出稼ぎ者であった。

### 3-4. 出稼ぎ先での職業とその動向

出稼ぎ先での職業は開始当初から一貫して都市部における肉体労働や小売業が多かった。これは、I 村の成人男性の大部分が就学歴を持たず、初等教育の修了者が 2 名にすぎないという教育水準の低さと強く関係している。彼らの学歴では公的機関などパーマネントな職に就くことは出来ない。また、ブルキナファソやコートジボアールの公用語であるフランス語を学校教育以外では習得する機会が無い I 村の人たちのフランス語能力は職を求めるに当たって非常に不利であった。

I 村には長い間小学校に就学する者がいなかったが、1990 年隣村に小学校が建設されてから徐々に就学するものが増え、2008 年 1 月までに 9 人が入学した。そのうち 2008 年 1 月時点での就学者は 3 名であった。また、中学校への進学者は延べ 2 名、2008 年現在の就学者は 1 名であった。小学校建設後も就学者が少ないという現状をみると、学歴が出稼ぎ先での職業の変化に劇的な変化をもたらすことはあまり期待できず、現在の傾向は当面継続すると考えられる。

出稼ぎ先がアビジャン、ラゴス、アクラといった経済的中心地に集中していることは、出稼ぎ者の職業が、学歴や語学力を必要としない単純な職種に特化していることと大いに関係している。つまり、インフォーマルセクターの職種の中でも特に参入が容易な仕事に就くため、地域で最大の経済規模を有し、なおかつ景気の好調な都市を出稼ぎ先として選ぶというわけである。

大きな傾向では変化が見られなかったものの、1990 年代に入り一部の職種への集中という現象が見られるようになった。それは場所を固定した露店での小売業である。2008 年 1 月時点では、アビジャンへの出稼ぎ従事者 31 名のうち、専業で荷車引きに従事した 1 名を除き、残り 30 名が露店での販売業に従事していた。

2008 年 1 月現在、これらの露店はアビジャンのある特定の地区に集中している。この地区における I 村出身者による最初の露店は、N 氏が 1982 年に始めた雑貨および新聞の販売である。彼はそれで成功を収めた。その露店経営を継続するため 1980 年代後半には、N 氏の帰村時には彼の弟が店番をするようになった。そして、彼の引退後も弟たちは交代で露店を運営し続けていた。N 氏とその弟たちの成功以降、露店業を始める者が相次いだ。そしてそれらの露店は、例外なく兄弟やごく近い血縁者によるローテーションで継続的に経営されるようになってきた。

2008 年 1 月時点で、I 村の出稼ぎ者が経営している露店は 16 店舗<sup>2)</sup>あり、隣接するなど 100m あまりの範囲に密集しているとのことであった。店舗の集中立地によって、1 名で数軒の露店を管理することも可能であるため、年長の出稼ぎ者を 1 名残し、若手の出稼ぎ者は頻繁に行商に赴

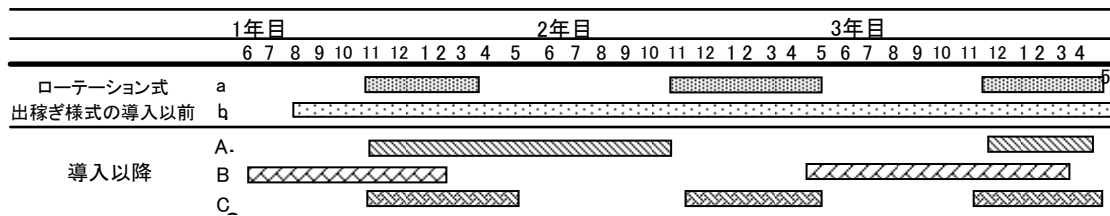
くということも行われた。兄弟で多数の出稼ぎ者を抱えている場合には、複数の店舗を経営する例も見られたという。異なった通りに店舗を設置して同一商品を扱うということでもあり、在庫を共有することで商品のだぶつきを抑えつつ、販売機会の増加を意図しているのだという。また、同一商品を扱う店舗を経営する者は共同で仕入れを行っているという。

2000年以降、日中は露店での販売を行い、夜には大規模商店やガソリンスタンドの夜警をする者が現れ始めた（2008年1月現在4名）。夜警の収入は露店業よりも安定し、且つ額でも上回っているため、状況次第では今後もこの兼業形態は増加すると思われる。

### 3-5. 労働力流失への対応

3

露店の家族経営は、ローテーションによる出稼ぎ労働の実施を可能にしたことはもう述べたが、このことは村における生業活動の主たる担い手のローテーションにも繋がった。例えば、2名が1年おきに農耕・放牧活動に従事する場合や、そこに乾季のみ出稼ぎ労働を行う者が加わる場合などがある（第5図）。これはすなわち、村における生業活動に軸足を残しつつの出稼ぎ労働が可能になったことを示している。



第5図 出稼ぎ労働の従事期間

それでは、露店経営の浸透によって初めてローテーション式の出稼ぎ労働が実現したかという点、そうではない。出稼ぎ労働開始当初は、経験不足もあり当座の収入を得るために参入の容易な仕事に就く者ばかりであった。そこで、条件の良い職を得た者はその職を手放したくないために、村での生業活動を放擲し、数年にわたり出稼ぎを続ける者も多かった。しかし、出稼ぎが継続的に行われ日常の営みとなるにつれ、村での生業活動を維持しつつ出稼ぎを行おうとする者が出始め、1つの勤め口に交代で従事する者が現れた。ただし、これを実践するには後任人事の決定が可能もしくは左右できるほどの発言力を要するため、1990年代初頭までは多く見られなかった。その状況が、露店での小売業という自ら経営に携わることが可能でかつ参入の容易な職種の開拓によって一変し、90年代中盤に入るとこの様な出稼ぎの方法が急速に浸透してきたのである。

ローテーション式出稼ぎ方法は、一人あたりの出稼ぎ期間が短期間で済み、またその期間の管理も容易であるため、これまで参入できなかった者も出稼ぎに出られるようになった。彼らは、家族の年長者が出稼ぎ労働に出ている時にひたすら村で農業や放牧を行っていた若者たちである。1970年代・80年代生まれの彼らが適齢期に達した時にローテーション式出稼ぎ方法の条件が整い、彼らの多くが出稼ぎに行くようになったのである。また一般に、村を長期間不在にすることが良しとされない既婚者もまたローテーション式出稼ぎ方法の確立で出稼ぎに出ることが可能となってきた。こうして1990年代中盤以降には36歳以上の出稼ぎ者も増加した。これらの結果として、2000年代に出稼ぎ者数が急速に増加したのであった。

すなわち、I村の人々はローテーション式出稼ぎ労働様式を採用することで、積極的な出稼ぎ

労働を行いつつもの村における生業活動のための労働力確保を可能にしたのである。

#### 4. 考察 —出稼ぎ労働の生計システムへの統合—

最後に、ブルキナファソ北東部に位置する I 村における出稼ぎ労働の傾向を時系列を追って見ていくことで、サヘル地域のある農牧民社会において出稼ぎ労働が浸透して行った過程を概観しておきたい。

I 村における出稼ぎ労働は 1960 年代に始まった。しかし、当初は少数の先駆的若年成人男性による限定的な出稼ぎであった。

1970 年代に入り、適齢期に達した多数の若者が出稼ぎ労働に従事し始めた。I 村の成人男性による出稼ぎ労働への本格的参入が開始された時期であったといえる。

1980 年代には、出稼ぎが日常化し、散発的ではあるが交代で出稼ぎに出る者も現れ始めた。ローテーション式出稼ぎ労働が開始された時期といえる。しかし、多くの者は村における生業活動を中断して出稼ぎに出るという形をとっていた。

1990 年代になると、出稼ぎ先での仕事が露店商に集中しはじめ、それに伴いローテーション式出稼ぎ方法が浸透してきた。これによって、出稼ぎが容易になり後進の若者や既婚男性の継続的出稼ぎが開始されることになった。

2000 年代に入ると、出稼ぎ労働を開始する者が引退者を上回り、出稼ぎ者数が急速に増加しはじめた。また、露店での小売業を継続したまま、他の職種にも進出する者が現れ始めた。出稼ぎ労働が定着し成熟した時期だといえるであろう。

以上をまとめる。出稼ぎ労働の開始当初は、村における生業活動と出稼ぎ労働は切り離された存在であった。すなわち、出稼ぎ労働を行う場合には村での生業活動は中断せざるをえず、出稼ぎ者の増加は労働力の流出に直結していた。当時は、出稼ぎを制限されていた後進の成人男性によって、農村部の生計システムはかろうじて維持された状態であった。

関連性の薄かった、村における生業活動と出稼ぎ労働を 1 つのより大きな枠組みの中での生計システムとして統合することを可能にしたのは、ローテーション式出稼ぎ方法の創出とその実践に適した出稼ぎ先での職の開拓であった。これにより、未婚の成人男性はもちろんのこと既婚男性も含めた成人男性全体による長期的出稼ぎ体制が確立されたといえる。

---

1) Titinga Frédéric Pacere (2004) Burkina Faso: Migration et droits des travailleurs 1897-2003, UNESCO, Paris

2) 交代での露店経営は、1 店舗を 2 名で行う場合だけでなく、1 店舗を 3 名で行う場合や 2 店舗を 3 名で行う場合、他村の血縁者が参画している場合も確認された。